福井県里山里海湖研究所年報 2015

Fukui Prefectural Satoyama-satoumi Research Institute,
Annual Report 2015

うららの里山里海湖写真コンテスト（主催：福井県里山里海湖研究所）
福井県知事賞作品　広部　紀美子 氏「田植え途中、母と子の休憩」

平成２７年７月

福井県里山里海湖研究所

目　次

１　平成２６年度事業概要および平成２７年度事業計画・・・・・・・・・・・　１

２　平成２６年度事業報告
（１）研究　・・・・・・・・・・・　３
（２）教育　・・・・・・・・・・・　４
（３）実践　・・・・・・・・・・・　１０

３　主なイベント詳細報告
（１）福井ふるさと学びの森オープニング　・・・・・・・・・・・　１７
（２）里の元気フォーラム　・・・・・・・・・・・　１８
（３）日独ＳＡＴＯＹＡＭＡ研究フォーラム　・・・・・・・・・・・　２０
（４）ＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ国際パートナーシップ・・・・・・・　２１
第５回定例会合（ＩＰＳＩ－５）

４　研究員の活動
（１）研究の概要　・・・・・・・・・・・　２２
（２）学会発表・執筆活動 等　・・・・・・・・・・・　３１
（３）その他活動報告　・・・・・・・・・・・　３２

５　研究所資料
（１）沿革　・・・・・・・・・・・　３３
（２）組織　・・・・・・・・・・・　３３
（３）所長、研究アドバイザー　・・・・・・・・・・・　３４
（４）活動方針　・・・・・・・・・・・　３５

ごあいさつ

福井県里山里海湖研究所　所長　　進士　五十八

このたび、２０１４年度の活動内容および２０１５年度の活動計画を「福井県里山里海湖研究所年報２０１５」としてとりまとめました。

福井県里山里海湖研究所が活動を開始して本年７月で約１年８か月が経過しました。

学びの森での定期的な活動や専任研究員諸氏の全県的かつ精力的なフィールド活動をはじめ、研究所スタッフの総力をあげた全県各地における様々なイベントを通じて、当研究所の活動と目指そうとしている方向をご理解いただきつつあるのではないかと思います。

福井県土に広がる里山、里地、里川、里湖、里海の連続循環する生態系の健全性が危ぶまれ、またそれに依拠する県民生活との関係も様々の影響を受けています。

私にとって特別の、第二のふるさと・福井県が、元気で美しく豊かな県土を持続可能にするエリアマネージメントを実行できるかどうかは最大の関心事であり、微力ながら全力を傾注したいと思っております。

福井県土に展開する山から海まで美しく変化に富んだ大地、南限北限の多様な生物相。そこでの数千年にわたる先祖代々の営み、打刃物から繊維、メガネ、そして地場野菜からコシヒカリに及ぶ広汎な独自技術の開発力。そして多様で豊富な地域資源と共存共生してきた自然共生型の生産・生活・歴史・文化・景観の継承など。そのいずれもがすべての福井県民にとってお宝であり、誇りであり、それは世界一だと思っています。

しかし実際には、グローバル経済における競争力第一のマネー資本主義、少子高齢化と地域間格差などの荒波のなか里地里山地域の劣化と荒廃が度を強めています。県内全域で、農家林家とイノシシ、サル、シカとの斗いは日常化しています。

かつて西川福井県知事が「ふるさと納税」を提唱したとき、或る学者が税法理論上おかしいと異論を唱えました。いま、地方では自然も、経済も、生活も、財政も、どんなに厳しい状態になっているか、ご存知ないのかも知れませんね。

私たちの研究所が、いま福井県が抱えている課題解決をめざす「実学研究」を掲げているのはそのためです。

この研究所は、science for science.（科学のための科学）ではなくて、science for society.（社会のための科学）さらには science for policy.（施策と行動のための科学）までを視野に入れて、しかも多くの県民の皆さまはもとより、他の研究機関、教育機関、市民ＮＰＯ、行政機関、企業団体など多様な主体とも連携協力、共動参加をお願いしながら「福井県の自然と社会と経済と文化の持続可能性」を高めるため、如何に寄与できるかを考えながら研究をすすめてまいりたいと思っております。

今後とも、県民のみなさまの積極的な「共動」「参加」「支援」「理解」をよろしくお願い致します。

１　平成２６年度活動概要および平成２７年度活動計画

１　福井の里山里海湖の価値と研究成果を発信

・福井県の里山里海湖の価値を科学的に解明
・国内外の大学や試験研究機関と連携を強化
・福井県の里山里海湖フィールドに研究者・学生を受け入れ、福井県の地位を高める。

活動名	活動概要	実績・計画	
		２６年度実績	２７年度計画
研究活動	環境考古、保全生態、里地里山文化、森里海湖連環の４分野にて地域に貢献する実学研究を推進	研究計画作成、事前調査等着手	研究活動本格化
研究活動の発表	研究員が行った研究活動を積極的に学会や県民に発信	学会等で発表　５回 活動発表会　　２回	継続実施
研究所活動を国内外に情報発信	里山の保全再生活用に関する全国規模のフォーラムやイベントの開催を誘致	日独ＳＡＴＯＹＡＭＡ研究フォーラム開催（8 月）	日本緑化センターが実施する自然再生士認定講習を開催
県外研究者･学生等の受入れ支援	県外大学等とのパイプを構築し、本県の里山里海湖のフィールドを提供、調査・研究を行う研究者・学生を受入れ	研究者・学生受入 194 名	継続実施

２　里山里海湖資源と科学的知見を活かした人材育成

・保育園、幼稚園、小学校、中学校と連携した次世代の人材育成
・身近な生き物や季節の移ろいを感じ取れる子どもを育成

活動名	活動概要	実績・計画	
		２６年度実績	２７年度計画
生きもの歳時記調査	季節に応じて見られる生きものを県民が調査するとともに、中学理科教員が特定種を調査し、ホームページ等で結果公表	－	調査結果公表 学校教育に利用
小学校における身近な生きもの調査	小学校に専任アドバイザーを派遣し、学校周辺での継続した調査保全活動を支援 ※専任アドバイザー派遣は２７年度～	8 小学校	14 小学校
里山里海湖学校教育プログラム作成	学校の校外学習における里山里海湖体験活動についてまとめた指導者用教材を作成し、小中学校の授業で活用	三方五湖周辺の体験プログラム集作成	北潟湖周辺、奥越地区の体験プログラム集作成
里山里海湖出前講座	研究員等が積極的に地域に赴き、出前講座を開催	60 回実施 1679 名	継続実施
里山里海湖リーダーの育成	地域で頑張る自然再生団体等のレベルアップを図るため、指導者等を対象とした連続講座リーダーズカレッジを開催	15 回 649 名受講	5 回開催

３　里山里海湖体験の機会を提供

・県民に身近な体験フィールドを設け、自然再生団体、地域住民と共動し、研究・教育・実践を行う。

活動名	活動概要	実績・計画	
		２６年度実績	２７年度計画
ふるさと学びの森	里山での体験活動を通して、人の暮らしと自然との関わりを学ぶ「ふるさと学びの森」を開設し、多くの県民に里山里海湖に触れ親しむ機会を増やす	若狭町気山に開設 体験イベント７回 参加者 590 名	若狭・あわら・奥越の３拠点に拡充 県内各市町の里山体験施設と連携し、全市町に学びの森ネットワークを構築
ＳＡＴＯガール・ＳＡＴＯボーイ育成プロジェクト	里山への関心の低い若者世代を対象とした連続体験講座を実施	6 回開催、138 名参加	－
来所者向け体験講座	里山里海湖の伝統的な人の営みを学ぶ体験講座を実施	自然観察、工作体験等体験講座 2 回実施	体験コーナー充実 特別講座実施

４　里山里海湖の保全・再生・活用に頑張る団体を応援

・活動者のやる気を育む。
・里山里海湖を次世代へ継承

活動名	活動概要	実績・計画	
		２６年度実績	２７年度計画
専門家派遣	自然再生活動を行う団体等に、技術的指導・助言を行う専門家を派遣	小学校、地域団体等 27 回派遣	要請に応じて派遣
ビオトープ再生支援	耕作放棄地等のビオトープ再生を行う団体を支援	11 団体支援	10 団体支援
ふるさと研究員認定	里山里海湖にまつわる知恵や技を持つ県民をふるさと研究員に認定し、知恵の伝承や活動者への協力を実践	29 名	認定拡大
活動団体交流会	自然再生活動団体、農業者、漁業者、教育機関などによる情報交換および活動発表を行う交流会を開催	サンドーム福井にて交流会開催	－
里山里海湖活動者表彰	里山里海湖の保全再生活用に頑張る団体等を表彰	7 団体表彰	優れた活動者を表彰
写真コンテスト	人の営みと関わりの深い里山里海湖写真のコンテスト「うららの里山里海湖写真コンテスト」を開催	152 点応募 入賞作品 12 点表彰	－

２　平成２６年度事業報告

（１）研究【地域に貢献する実学研究：Science for society】

里山里海湖に関する研究者が、生物多様性を守り、その恵みを人々のくらしに結び付ける様々な研究を行う。

①実学研究の推進

□研究分野

研究分野	研究内容	研究者
環境考古	過去の気候と人の暮らしの関わり合いを解明し、これからの生活に活かす	北川淳子
保全生態	里山の保全・再生に関わる保全生態学的研究を行い、研究成果に基づき地域住民との協働による自然再生と利用を推進	石井　潤
里地里山文化	里の文化や習俗を研究し、これからの里の暮らしに活かす	中村　亮
森里海湖連環	陸域生態系と海域生態系のつながりを研究し、河川の流域圏から海域まで水を通したつながりの保全再生	福島　空

②調査・研究フィールドのメッカに

□研究者・学生への支援

県外大学等とのパイプを構築し、福井県の里山里海湖のフィールドを提供し、調査・研究を行う研究者・学生を受け入れ

平成２６年度実績：４５大学、６機関、１学会、延べ１９４名

③研究内容や活動の情報発信

□学会での発表

平成２６年度実績：　８月３０～３１日　日独ＳＡＴＯＹＡＭＡ研究フォーラム（若狭町）
１０月　４～　６日　ＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ国際パートナーシップ第５回定例会合（ＩＰＳＩ５）（韓国・平昌）

□研究発表会の開催

平成２６年度実績：５月１６日　研究活動発表会（福井市）
３月　７日　里の元気フォーラム（若狭町）

（２）教育【里山里海湖を「体感」し、感性を育む】

里山里海湖の自然を子どもたちに体感させ大切さを伝えるとともに、地域の保全・再生活動を担うリーダーを育成する。

④地域資源を活かした環境教育

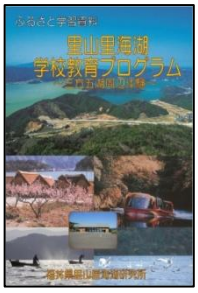
□「里山里海湖学校教育プログラム」作成

小中学校教員が、里山里海湖について児童生徒を指導するためのプログラムを現場の教員の意見を踏まえながら作成。環境教育を系統立てて学習ができるよう、学校での年間指導計画の中に位置付けた形でまとめた。

これにより、小中学校の教員が、「里山里海湖とは何か」、「里山里海湖でどんな活動ができるのか」を知ることができる手引書としての活用が期待できる。

平成２６年度実績：三方五湖周辺体験プログラム作成
県内全小中学校へ配布

ふるさと学習資料　里山里海湖学校教育プログラム～三方五湖周辺体験～
◇発　　行◇　平成２７年３月
◇編集協力者◇　脇田　典子（岡保小学校 校長）
中村　正人（瓜生小学校 校長）
岡本　浩之（県教育庁 義務教育課 指導主事）
島田　正樹（嶺南教育事務所 研修課 主任）
知場　克幸（同所 指導相談課 指導主事）
大野　　豊（県立海浜自然センター 主任）
中塚　一成（県立三方青年の家 主任）
小島　秀彰（若狭三方縄文博物館 学芸員）
土橋　佳久（里山里海湖研究所　研究事務員）



⑤生きもの調査

□「教員等と子どもたちによる身近な生きもの生息環境調査」

地域のメダカの数や、雪の深さなどを毎年継続して調査することで、地域の環境を守る環境を育てる。

平成２６年度実績：県内８つの小学校において実施

学校名	調査場所	共通調査	個別調査
一乗小学校（福井市）	朝倉氏遺跡内	積雪調査 動物調査 （メダカ、トンボ）	テントウムシ、バッタ、チョウなど
波松小学校（あわら市）	校庭、校区内		カマキリ、スズメ、タンポポなど
荒土小学校（勝山市）	校区内		イナゴ、ツマグロヒョウモン、クサギカメムシ
萩野小学校（越前町）	校区内		ゲンゴロウ、タイコウチ、ドジョウなど
北日野小学校（越前市）	校庭、周辺畑		コオロギ、トノサマガエル
咸新小学校（敦賀市）	中池見湿地等		モンシロチョウ、モンキチョウ
気山小学校（若狭町）	校区内		ナミマイマイ
瓜生小学校（若狭町）	校区内		マツカサガイ、カワムツ、カワニナ

⑥研究員講座の提供

□出前講座の開催

研究員等が積極的に地域や小中学校に赴き、出前講座を開催

平成２６年度実績：６０回講座開催、１，６８０人受講

【研究員による出前講座】　延べ５１回　１，３５１人受講

No.	開催日	内容	相手方	開催場所	人数	担当
1	H26.5.2	ビオトープにおけるメダカ放流	園児（加戸保育園）	農家レストランＮＯＲＡ（坂井市）	22	石井
2	H26.6.5	ＳＳＨフィールドワーク講義	高校生（若狭高）	若狭高校（小浜市）	14	福島
3	H26.6.6	三方五湖の自然環境を知る	中学生（上中中）	三方青年の家ほか（若狭町）	64	石井 中村
4	H26.6.8	ウシガエル取りと生き物観察	一般(海浜自然センター自然環境学習講座)	三方青年の家周辺（若狭町）	46	石井
5	H26.6.14	ホタルの生態について	ホタル観賞会(西田公民館、西田ホタルの会)	若狭町西田公民館	60	石井
6	H26.6.18	町生涯学習講座「里山から地域を元気に」	若狭町民	里山里海湖研究所	15	福島
7	H26.6.19	水月湖年縞堆積物の魅力	若狭湾観光連盟	レピア（若狭町）	40	北川
8	H26.6.19	ＳＳＨフィールドワーク講義	高校生（若狭高）	田烏地区（小浜市）	14	福島
9	H26.6.25	水田の自然再生と農薬を使わない害虫防除	福井農業農村整備事業促進協議会	ホテルフジタ福井（福井市）	50	石井
10	H26.6.28	若狭の里山里海湖の生物多様性	一般（福井ライフ・アカデミー講座）	若狭図書学習センター（小浜市）	16	石井
11	H26.7.2	里山から地域を元気に	福井市環境推進会議自然創造部会	中池見人と自然のふれあいの里(敦賀市)	11	福島
12	H26.7.5	若狭地方の里地里山の植生について	日本ビオトープ管理士会福井県支部	繊協ビル（福井市）	40	石井
13	H26.7.10	ＳＳＨフィールドワーク講義	高校生（若狭高）	若狭高校（小浜市）	14	福島
14	H26.7.14	里山から地域を元気に	藤井老人クラブ	水月花（若狭町）	32	福島
15	H26.7.17	年縞について	三方小学校６年生	若狭町観光船レイククルーズ（若狭町）	21	北川
16	H26.7.17	メダカの観察とメダカを使った自然環境教育	坂井市保育士会サークル自然グループ	坂井健康センター・坂井市役所(坂井市)	33	石井 福島
17	H26.7.19	三方五湖の自然と生活	高槻市ボーイスカウト	三方五湖（若狭町・美浜町）	51	中村
18	H26.7.20	年縞について	気山小、王子保小（三方青年の家プログラム）	三方青年の家（若狭町）	22	北川
19	H26.7.21	奇跡の湖　水月湖の年縞について	一般（縄文博物館講座）	縄文博物館（若狭町）	20	北川
20	H26.7.23	世界の標準時計　福井の「年縞」について	二州ブロック理科教員	敦賀市立図書館（敦賀市）	17	北川
21	H26.8.4	「世界の標準時計『水月湖の年縞』をさぐる」	若狭ブロック理科教員	若狭町レイククルーズ（若狭町）	19	北川 中村
22	H26.8.5	水月湖の年縞	ＳＳＣ指定高校科学部生徒・教職員	縄文博物館ほか（若狭町）	41	北川
23	H26.8.7	里のいきものと人とコウノトリのくらし	小中学生(鯖江青年の家サマーチャレンジ)	鯖江青年の家（鯖江市）	35	石井

24	H26.8.9	北潟湖の自然となりわいの今むかし	小中学生(芦原青年の家サマーチャレンジ)	芦原青年の家（あわら市）	36	中村
25	H26.8.9	森のテーマパークへようこそ	小中学生(奥越青少年自然の家ｻﾏｰﾁｬﾚﾝｼﾞ)	奥越青少年自然の家（大野市）	40	福島
26	H26.8.13	日本海側の杉の木の歴史	小中学生(三方青年の家サマーチャレンジ)	三方青年の家・縄文博物館（若狭町）	30	北川
27	H26.8.19	三方五湖の自然について	小中学生(里山里海湖体験サマースクール)	里山里海湖研究所ほか(若狭町・美浜町)	16	北川 中村
28	H26.9.10	三方五湖をめぐる外来種と生物多様性	小学生（咸新小）	咸新小学校（敦賀市）	29	中村
29	H26.9.18	幼児里山体験活動について	坂井市保育士会	総合グリーンセンター（坂井市）	40	福島
30	H26.9.23	森のようちえんと楽校	園児・小学生および保護者	自然保護センター自然観察の森(大野市)	34	福島
31	H26.10.4	ＳＳＨ講義	高校生（若狭高）	県立大学小浜キャンパス（小浜市）	37	北川
32	H26.10.20	三方五湖における自然再生活動等の解説など	滋賀県いきものふれあい室 生物多様性活動支援センター	里山里海湖研究所・三方五湖（若狭町）	10	石井
33	H26.10.21	ＳＳＨ講義	高校生（若狭高）	若狭高校（小浜市）	10	北川
34	H26.10.22	水月湖年縞について	観光客(日経カルチャーツアー)	若狭町観光船レイククルーズ（若狭町）	6	北川
35	H26.10.27	ＳＳＨ講義	高校生（若狭高）	若狭高校（小浜市）	10	福島
36	H26.10.30	里山から地域を元気に	一般(福井ライフアカデミー講座)	ユーアイふくい（福井市）	20	福島
37	H26.11.8	自然と人が元気になる「ふるさと学習」とは	教員、保護者（教育研究福井県集会）	勝山市南部中学校（勝山市）	40	福島
38	H26.11.20	森と海のつながりがささえる生物多様性	小学生（三方小）	三方小学校（若狭町）	21	中村
39	H26.11.20	里山保育について	坂井市保育士会	春江中公民館（坂井市）	30	福島
40	H26.11.26	水月湖年縞について	（公財）福井観光コンベンションビューロー	若狭三方縄文博物館（若狭町）	32	北川
41	H26.12.3	わかめの芽付け	小学生（三方小）	遊子地区（若狭町）	21	中村
42	H26.12.4	「ゆりかご水田」に生育する水草について	小学生（三方小）	三方小学校（若狭町）	25	石井
43	H26.12.13	三方五湖の自然環境と生きものの多様性	小学生（三方小）	三宅小学校（若狭町）	17	石井
44	H26.12.20	里山保育について	ＮＰＯ法人 若狭くらしに水舎	県立大学小浜キャンパス（小浜市）	20	福島
45	H26.12.23	ＳＳＨ 水田ボーリング調査	高校生（若狭高）	東黒田地区（若狭町）	10	北川
46	H27.1.13	ＳＳＨ講座 堆積物観察指導	高校生（若狭高）	若狭高校（小浜市）	10	北川
47	H27.1.20	ＳＳＨ講座 花粉分析指導	高校生（若狭高）	若狭高校（小浜市）	10	北川
48	H27.1.29	奇跡の湖『水月湖年縞』	嶺南地区商工会連絡協議会	若狭東商工会議所（若狭町）	20	北川
49	H27.2.7	森のようちえん	園児（清水台保育園）	清水北地区（福井市）	50	福島
50	H27.2.20	里山の生物多様性の成り立ち　ほか	福井県町教育長会	若狭町役場（若狭町）	10	石井 中村
51	H27.2.26	研究所から見た三方地域の自然環境について	西田ホタルの会	梅の里小学校（若狭町）	20	石井

【研究事務員による出前講座】　延べ９回、３２９人

№.	開催日	内容	相手方	開催場所	人数	担当
1	H26.9.10	水月湖の年縞プログラム	小学６年生	瓜生小学校(若狭町)	33	土橋
2	H26.9.27	三方五湖と水月湖年縞	小学校全児童	熊川小学校(若狭町)	20	土橋
3	H26.10.7	雲谷山登山	小学６年生	三方小学校(若狭町)	21	土橋
4	H26.10.24	行方久兵衛と浦見運河	小学４年生	瓜生小学校(若狭町)	18	土橋
5	H26.10.25	三方五湖の自然	中学生	上中中学校(若狭町)	80	松村 土橋
6	H26.11.29	どんぐりの話とどんぐりアート	小学１、２年生	野木小学校(若狭町)	22	土橋 大岸 中元
7	H27.1.22	ふるさと学習	中学生	気比中学校(敦賀市)	90	土橋
8	H27.2.21	田んぼの生きもの	小学３、４年生	野木小学校(若狭町)	21	吉岡 土橋
9	H27.3.7	田んぼの生きもの	小学５，６年生	野木小学校(若狭町)	24	吉岡 土橋

□里の学校

研究員等による里山里海湖に関する講座などを、小中学校において１０時間以上受講し、里山里海湖ジュニア検定に合格した児童・生徒を里山里海湖ジュニアマスターに認定

平成２６年度実績：若狭町立三方小学校において実施
小学６年生２１人をジュニアマスターに認定

稲刈り体験

年縞の授業

認定式

ジュニアマスターの声
・ヨシのくきを切ってみたら、中が空どうになっていておどろきました。
・水月湖には「年こう」というものがあって、世界的に貴重なものだということがわかりました。
・これからも三方五湖の自然を大切にしていこうと思いました。

⑦体感プログラムの提供

□「ＳＡＴＯガール、ＳＡＴＯボーイ」育成講座

里山への関心が薄いと言われている若者を対象に、楽しみながら福井の里山の魅力、保全の大切さを学ぶ連続講座を開催

平成２６年度実績：６回実施、１３８名の若者が参加

No.	開催日	会場	講師	内容	参加人数
1	6/29 （日）	池ケ原湿原他 （勝山市）	池ケ原湿原連絡協議会 会長　小林　則夫	六呂師高原を満喫 ～湿原散策とミニよしずづくり～	24
2	8/2 （土）	久々子湖 （美浜町）	コミュニティビジネス　ラ・しじみ 代表　田辺　義郎	五湖のめぐみをまるかじり① ～和船漕ぎとシジミ漁体験～	28
3	8/3 （日）	若狭町梅加工体験施設他 （若狭町）	梅農家 大下　恭弘	五湖のめぐみをまるかじり② ～マイ梅酒（梅ジュース）づくり～	30
4	10/11 （土）	剱岳公民館他 （あわら市）	もりみちプロジェクト 大橋　広子	秋の野草に学ぶ ～セイタカアワダチソウで草木染～	15
5	11/15 （土）	林正寺 （越前市）	林正寺住職　楠　宏彰 端政寺坊守　鹿浦　聡子	ふくいの和食をたしなむ ～報恩講料理づくり～	19
6	1/24 （土）	アオッサ （福井市）	料理家 藤本　よしこ	都会でシカでおもてなし ～シカ肉調理実習・試食～	22

池ケ原湿原散策

シジミ漁体験

セイタカアワダチソウ草木染

参加者の声

・体験をまじえて、色々なことを知ることができて良かった。福井県にも、まだまだ知らない、すてきな所があるんだなぁと改めて感じた。(30 代・女性)

・報恩講料理をテーマに、お寺を支えるしくみについて知る事ができ、またそのしくみの転換期を向えている事に考えさせられました。里山の維持、農村のかかえる問題にもリンクするという話は興味深いものでした。(40 代・男性)

・身近に生きている命を頂くことで、人間の生活や自然が守られること、里山の生き物達と共生することにつながるのだと有難く思いました。伝える立場にもなれたらいいと思います。(30 代・性別不明)

⑧里山里海湖リーダーの育成

□里山里海湖リーダーズカレッジ開設

地域で頑張る自然再生団体等の指導者のレベルアップや一般県民の関心を高めるため、県内の里山里海湖の保全・再生について、今後どのようにすべきかを県民と一緒に考える講座を開設

平成２６年度実績：１５回開催（大学連携リーグとの共催)、延べ６４９名受講

No.	開催日	場所	講演者	講座名など	参加人数
1	6/3 （火）	アオッサ607 （福井市）	NPO法人共存の森ネットワーク 理事長　澁澤　寿一	里山里海湖の暮らしが、私たちに教えてくれること	70
2	6/14 （土）	海浜自然センター （若狭町）	里山里海湖研究所 研究員　石井　潤	自然観察指導員養成講座「植物採集を学ぼう！」	16
3	7/1 （火）	アオッサ607 （福井市）	福井工業大学 教授　草桶　秀夫	ホタルの生態と環境保全	65
4	7/6 （日）	池ケ原湿原 （勝山市）	自然保護センター 自然観察指導員の会	池ケ原湿原ミニウォーク -ほのかな香りのミズチドリ-	25
5	7/11 （金）	アオッサ607 （福井市）	福井県立大学 教授　吉岡　俊人	雑草なのに絶滅危惧種！？アゼオトギリから考える福井平野の生物多様性	51
6	7/18 （金）	アオッサ607 （福井市）	福井県立大学 助教　杉本　亮	生き物を育む元素の動きと水環境 ～若狭の山・川・里・海を例に～	48
7	7/21 （月祝）	波松海岸 （あわら市）	福井県立大学 ＰＪ研究員　赤井　賢成	フィールドツアー①（嶺北：里地・里海の植物）波松海岸と白髯神社周辺に生育する海浜植物と人里植物の観察	26
8	7/25 （金）	アオッサ607 （福井市）	福井県立大学 准教授　田原　大輔	九頭竜川のシンボルフィッシュ ～アラレガコ・サクラマス・アユ～	45
9	7/27 （日）	文殊山 （福井市）	福井県立大学 ＰＪ研究員 赤井 賢成	フィールドツアー②（嶺北：里山の植物）文殊山の落葉広葉樹二次林に生育する林床植物の観察	荒天中止
10	8/1 （金）	アオッサ607 （福井市）	福井県立大学 教授　富永　修	外来生物について考えてみよう ～排除それとも共存～	42
11	8/9 （土）	県立大学小浜キャンパス （小浜市）	福井県立大学　教授　富永 修、 准教授 田原 大輔、助教 杉本 亮	フィールドツアー③（嶺南）山川里海のつながりを実感しよう	荒天中止
12	8/14 （木）	アオッサ607 （福井市）	福井工業高等専門学校 名誉教授　吉村忠与志	生物と共生する中での持続可能な社会	31
13	9/5 （金）	アオッサ607 （福井市）	モリエコロジー㈱ 代表取締役 森 鐘一	森里海湖連環について	30
14	10/20 （月）	アオッサ607 （福井市）	ＮＰＯ法人山菜の里いび 理事長　小寺　春樹	里山の保全再生の現場から（過疎の村を薬草で地域おこし）	20
15	3/7 （土）	三方青年の家 （若狭町）	里山里海研究所 研究員	県里山里海研究所の研究内容の発表等	180

第１回講座

第２回講座

参加者の声

・活動をしているといつも悩むことがあるが、お話をお聞きし、再度頭を整理することができました。(40 代・男性)

・集落再生のために地道に取り組んでこられた姿に頭の下がる思いがした。全国各地で問題になっている限界集落のひとつの参考になると思った。日本の大切な宝である里山集落は是非残していきたいと強く感じた。(50 代・男性)

（３）実践【次世代につながる持続可能な里山里海湖の保全・再生・活用】

里山里海湖の保全・再生に頑張る地域や団体を応援や支援するとともに、共に活動することで、研究成果を人々の暮らしに活用する仕組みを構築する。

⑨「福井ふるさと学びの森」での体験活動

□「福井ふるさと学びの森」で体験講座を実施

里山での体験活動を通して、人の暮らしと里山との関わりを学ぶ。

平成２６年度実績：６月　福井ふるさと学びの森（若狭町気山）を開設
参加者５９０名　〔体験講座９回　遠足等受入１３回〕

平成２６年度「ふくいふるさと学びの森」体験講座企画一覧

No.	開催日	タイトル	主な内容	参加人数
1	7/26（土）	みんなで作ろう！森の遊び場	自然にあるものを使って、森と楽しく触れあいながら、里山の魅力について学ぶ	13
2	8/10（日）	めざせ！里山の生き物マスター	生きもの博士と一緒に、里山を探索し、生きものについて学ぶ	荒天中止
3	8/21（木）	竹をフル活用！竹工作とそうめんパーティー	竹を使った工作や流しそうめん等を体験して、楽しみながら竹の活用について学ぶ	41
4	9/21（日）	森のエネルギーで火をおこそう！	みんなで薪を集めて、火おこしを体験し、木が持つエネルギーについて学ぶ	16
5	10/19（日）	ウッジョブ！森のお手入れ大作戦	森の名人から教わりながら、里山を守っていくことについて体験しながら学ぶ	32
6	11/9（日）	里山のおいしいめぐみ！キノコを作ろう	森のなかでキノコ作りを体験し、里山の食の知恵について学ぶ	31
7	11/16（日）	探そう！里山の秋	夏とは違った表情を見せてくれる秋の森を歩きながら、木の持ついのちの仕組みについて学ぶ	20
8	12/7（日）	食べて学ぼう！里山と動物たち	ハンターに教わりながら、里山に棲む動物たちとの上手な付き合い方について学ぶ	荒天中止
9	3/28（土）	聴こえた！春の足音	山菜やタケノコを探しながら、昔から食べられてきた里山のめぐみについて学ぶ	38

参加者の声
・作られた公園での遊びではなく、自然の中で子どもたちが自由な発想で活動することはなかなかできないため、貴重な機会だった。（40 代・女性）
・のこぎりで木を切るのが最初は難しかったが、出来て嬉しかった。（小 3・男性）
・近くに山があっても、なかなか遊ばせてやれないので、嬉しそうに遊ぶ子供を見て私も嬉しかったです。（40 代・女性）

⑩活動者の「やる気」の醸成

□「里山里海湖活動者表彰」創設

保全・再生の活動者を幅広く表彰し活動を応援

平成２６年度実績：７団体表彰（里の元気フォーラムにおいて表彰）

表彰団体一覧　（５０音順）

団体名 （主な活動市町）	活動概要
青葉山里山整備の会 （高浜町）	青葉山の豊富な植物相や、樹齢３００年を超える巨木が多く残る自然の魅力を生かしながら、竹の利活用をはじめとした里山整備活動や、地域住民・観光客へのＰＲ活動に取り組んでいる。平成２６年度は、青葉山周辺の巨木を紹介する巨樹・巨木マップの作成および樹名板の整備を行うなど、地域の魅力アップにつながる活動を強化している。
あわらの自然を 愛する会 （あわら市）	地域住民に地元の自然の魅力を見つめ直してもらうことを目的に取り組む「あわらの自然再発見」作品募集企画や、地域の小学校、保育所等と連携した植樹や山野草保全などの里山保全活動、ビオトープの整備などの様々な活動に熱心に取り組み、その活動を年々着実に拡大させている。
特定非営利活動法人 中池見ねっと （敦賀市）	平成２４年にラムサール条約湿地に登録された中池見湿地にて、地域の小中学校、高校と連携した保全活動や観察会、湿地保全に関する研究者と連携した勉強会やフォーラムの開催など、精力的な活動を行っており、平成６年以来観察例がなく絶滅が懸念されていた県域準絶滅危惧種アオヤンマが２０年ぶりに確認されるなど、着実な保全活動の成果が見られる。
日本農武士ネット ワーク （坂井市）	高齢化による農地離れが進む坂井市竹田地区にて、耕作放棄地を借りて無農薬・無化学肥料で米やソバを生産し、平成２６年度は栽培面積を約５ヘクタールに拡大させている。就農希望者を受け入れる研修や、福祉施設等と連携した農業体験活動、地域住民とともに行う田植えや稲刈りイベントなどを積極的に実施するなど、地域との連携を深め活性化につなげている。
ハスプロジェクト 推進協議会 （若狭町）	子どもたちが地域の大人から聞き取った昔の三方五湖周辺を描く「昔の水辺の風景」絵画企画や、希少な生き物が生息するカヤ田での保全活動、三方五湖周辺の外来生物の駆除活動など、子どもから大人までが楽しくふれあいながら行う様々な活動を実施している。平成２６年度には、地域住民に「食」を通じた三方五湖のめぐみを再発見してもらうことを目的とした「五湖のめぐみフォーラム」を盛大に開催し、地域を元気にする活動を更に強化している。
水辺と生きものを 守る農家と市民の会 （越前市）	地域の小中学生への体験学習機会の提供や、地域外住民とともに周辺里地での無農薬・無化学肥料の米作りに取組む田んぼファンクラブ活動、地域住民がコウノトリの見回りを行うコウノトリ見守り活動、農家民泊・エコツーリズム活動など、コウノトリをシンボルとした活動に積極的に取り組み、人も生きものも元気が出る地域づくりに着実な成果が見られる。
みはまＹｕｍＹｕｍ ＰＲＯＪＥＣＴ （美浜町）	米ＳＴＡＲＳと名付けられた子どもたちへの年間を通じた無農薬の米作り体験プログラムや、地域の耕作放棄地を舞台に大人も参加して行うドロリンピック、大阪天神橋筋商店街での子どもたちによるお米販売など、様々な魅力あふれる体験を通じて、子どもたちへの米作りだけに留まらない様々な学習の機会を提供している。

□ふるさと研究員の認定

ふるさと研究員（農業・文化・環境・観光・民俗・ビジネス）を認定し、単なる技術の伝承だけでなく、その意味合いについても伝承

平成２６年度実績：２９名認定（里の元気フォーラムで認定）

ふるさと研究員認定者一覧　　（５０音順）

No.	氏名	市町	主な活動分野
1	池上　成志	若狭町	森づくり、きのこ観察
2	江戸　豊	若狭町	獣肉の有効活用
3	大石橋　節子	福井市	自然体験活動
4	大野　文子	若狭町	伝承料理、里山の生け花
5	荻田　英爾	福井市	農業・農村体験、自然体験活動
6	尾崎　恵里	若狭町	農業・農村体験
7	小澤　聖輔	福井市	里山整備、間伐材の有効利用
8	尾花　幸次	おおい町	竹工作体験
9	加藤　豊純	坂井市	伝承料理、クラフト体験
10	河田　勝治	あわら市	山野草の保全、史跡探訪
11	組頭　五十夫	あわら市	野鳥観察
12	坂本　均	大野市	自然体験活動
13	竹内　成子	若狭町	農業体験、食育活動
14	飛永　悦子	若狭町	伝統野菜、伝統文化
15	鳥居　直也	小浜市	自然体験活動、
16	中村　悟	若狭町	ネイチャークラフト、
17	夏野　宣秀	福井市	獣肉の有効活用
18	野村　みゆき	越前市	農業・農村体験、伝承料理
19	萩原　茂男	おおい町	自然体験活動、林業体験活動
20	日野岡　金治	越前市	ネイチャークラフト、森づくり活動
21	福嶋　徳美	鯖江市	自然体験活動
22	福地　伸二	敦賀市	竹林の保全
23	福地　久子	敦賀市	竹の有効利用
24	藤原　一功	福井市	里山整備、木工クラフト体験
25	細川　和朗	福井市	自然体験活動
26	増井　増一	若狭町	里湖の技の伝承
27	水谷　弘則	敦賀市	農業体験
28	吉田　良三	若狭町	里湖の技の伝承
29	吉村　義彦	若狭町	農業体験

□里地里山地域資源ネットワーク交流会の開催

団体、農業者、漁業者、教育機関などによる情報交換・活動発表

平成２６年度実績：平成２７年３月１５日開催（越前市内）７０名参加

□保全活動応援

保全・再生活動や自然観察会などに必要な資機材を提供

平成２６年度実績：
　３月　ウッドチッパー、薪割り機、組み立て式炭化炉を貸出し開始

ウッドチッパー

薪割り機

炭化炉

□自然再生支援隊派遣

地域、団体、学校、企業が行う保全活動などに対して技術的指導・助言

平成２６年度実績：２７回派遣

□里山生き物バンク支援

耕作放棄地等のビオトープ再生を支援

平成２６年度の主な実績：１１団体を支援

⑪里山里海湖資源の再認識

□里山里海湖人の営み写真コンテストの開催

里山里海湖の魅力と人の営みを再認識するとともに里山里海湖の価値を発信

平成２６年度の主な実績：
４月～１２月　募集　１５２点の応募
３月　　里の元気フォーラム（若狭町内）で表彰、１２作品入賞

入賞者一覧

賞	題名	撮影地	氏名（敬称略）
福井県知事賞	田植え途中、母と子の休憩	福井市	広部　紀美子
里山里海湖研究所長賞	カヤ刈り取りと「つと」作り	小浜市	西本　吉右ェ門
春の里山里海湖賞	荒島岳を望んで	大野市	川縁　功
	田植え	坂井市	半田　信和
夏の里山里海湖賞	水田魚道整備	若狭町	高鳥　紀子
	極楽平笹竹刈り払い整備	大野市	岡田　政治
秋の里山里海湖賞	田んぼ女子	若狭町	新田　美優
	秋祭り	敦賀市	石亀　嶽
冬の里山里海湖賞	たたき網漁	若狭町	原田　寿
	鯖の熟れ鮨づくり	勝山市	岡田　栄一
入選	九頭竜川アユ釣り解禁	永平寺町	天谷　菜海
	お焼事講	南越前町	細井　久子

⑫その他

□里山里海湖研究所ホームページをリニューアル
□生物多様性を学ぶ「学びの本箱」（約２００冊）を新設
□水月湖年縞の紹介展示

研究所ホームページ

学びの本箱

年縞展示

□主催・共催イベント

イベント８回、延べ参加者３３５名

開催日	イベント名	対象	参加人数	主催
H26.5.4	里山里海湖ミニウォーク	一般	14	里山里海湖研究所
H26.6.28	梅収穫と梅シロップ作り	一般	9	里山里海湖研究所
H26.8.2	里山里海湖体験サマースクール	小中学生親子	20	自然保護センター
H26.8.9	里山里海湖体験サマースクール	小学生親子	33	海浜自然センター
H26.9.23	森のようちえんと楽校	一般	34	自然保護センター
H26.11.23	五湖のめぐみフォーラム	一般	130	ハスプロジェクト推進協議会
H26.11.23	ごはん塾	若狭町在住親子	70	若狭町
H26.12.23	五湖のめぐみとしめ縄づくり	一般	25	ハスプロジェクト推進協議会

□出展イベント

１２イベントで研究所事業をＰＲ

開催日	イベント名	対象	主催
H26.4.26-27	海浜自然センターリニューアル	一般	海浜自然センター
H26.5.17	若狭・三方ツーデーマーチ	一般	若狭町
H26.7.21	若狭路さとうみフェスティバル	一般	県主催
H26.8.17	コウノトリこどもフォーラム	一般	県主催
H26.8.23-24	石川県環境フェア	一般	石川県
H26.9.14	若祭	一般	若狭町
H26.10.5	グリーンフェア	一般	総合グリーンセンター
H26.10.11-12	ふるさと環境フェア	一般	環境ふくい推進協議会
H26.10.26	レインボーライン秋祭り	一般	若狭町
H26.11.22-23	科学の祭典	一般	科学の祭典実行委員会
H26.12.20	自然学校・自然エネルギーフォーラム	一般	NPO 若狭くらしに水舎
H27.3.21	道の駅三方五湖オープニング	一般	県、若狭町

□研修等受入れ

１０団体１６８名の研修や遠足を受入れ

開催日	内容	来訪者	参加人数
H26.5.1	遠足受入	三宅小１、２年生	34
H26.5.2	遠足受入	気山小４～６年生	26
H26.10.30	遠足受入	国富小３、４年生	14
H26.8.4	北海道霧多布高校研修受入	霧多布高校生	4
H26.6.4	国家公務員初任者研修受入	国家公務員初任者	3
H26.8.22	体験研修受入	ボーイスカウト武生第５団	22
H26.10.21	研修受入	若狭湾生物同好会	15
H26.11.1	研修受入	福井市安居公民館	10
H26.11.7	研修受入	佐鳴湖を愛する会	13
H26.11.30	研修受入	富岡まちづくり協議会	27

□里遊び体験メニューの提供（来所者向け）

例）ワラ細工作り、竹工作、木のクラフト、水鳥観察など

□県内諸団体への側面的支援

・ハスプロジェクト協議会／地球環境基金を活用した「五湖のめぐみフォーラム」等開催
（支援：基金事業の紹介および応募協力、イベント共催）
・エコプラザさばえ／三菱ＵＦＪ環境財団事業を活用した市民植樹祭開催
（支援：財団事業の紹介および応募協力）
・鳥浜漁業協同組合／「いきものにぎわい企業活動コンテスト」審査員特別賞受賞
（支援：コンテスト紹介および応募協力）
・若狭町／町広葉樹植栽計画策定への支援・助言

□来所者数

	平成 25 年度	平成 26 年度
4 月	－	289
5 月	－	514
6 月	－	275
7 月	－	398
8 月	－	322
9 月	－	205
10 月	－	212
11 月	171	232
12 月	167	104
1 月	183	101
2 月	336	95
3 月	339	2,579
計	1,196	5,326

３　主なイベント詳細報告

（１）福井ふるさと学びの森オープニング

県民と共に、里山保全再生のための研究・教育・実践を行っていくフィールドとして若狭町気山区に「ふくいふるさと学びの森」を設置した。今後、子どもたちが山菜取りや山遊び、野鳥観察、間伐体験など里山の恵みを体感したり、環境学習の場として活用し、併せて、人の手が入ることによる里山の生態の変化も調べていく。

「ふくいふるさと学びの森」オープニング「森開き祭りと大討論会」

日　　時：平成２６年６月２１日（土）１３：３０～１６：００
場　　所：若狭町気山（美方高校近く）
森の面積：４ｈａ
参　　加：５０名
内　　容：①森開き祭り
・看板除幕
気山区寺谷総代（土地所有者）、若狭町・美浜町・れいなん森林組合、所長
・所長あいさつ
・感謝状（土地所有者である若狭町気山区寺谷総代へ）
・祝辞
②森開きの草刈り体験
・草刈り（１００㎡程度）
・森の散策（展望広場まで片道約３００ｍ）
③森の未来大討論会
・テーマ：「学びの森に期待すること」
・方　式：子どもと大人に分かれてのグループ討論会

森開き祭り

森の散策（展望広場にて）

森の未来大討論会（子ども）

森の未来大討論会（大人）

（２）里の元気フォーラム

研究員の活動発表や里山ビジネスの実践事例の紹介などを通じ、里山里海湖の保全と新たなビジネス創造につなげるためフォーラムを開催した。

・日　時　平成２７年３月７日（土）１０：００～１６：００
・場　所　県立三方青年の家（若狭町鳥浜）
・参加者　１８０名

第一部　里山里海湖研究所研究員の活動発表

・北川主任研究員（環境考古）　「水月湖・北潟湖の花粉分析による里山景観史復元」
・石井研究員（保全生態）　「自然との付き合い方～北潟湖と向き合う～」
・中村研究員（里地里山文化）　「福井の「多様」な魅力をさぐる」
・福島研究員（森里海湖連環）　「里山里海湖保育（森のようちえん）の推進」

第二部　和太鼓演奏と里山里海湖表彰

○和太鼓演奏

太鼓で人を幸せにしようと活動している「みはまこども倖太鼓」のみなさんが、見事な太鼓演奏で「光」、「雷」、「燦」の三曲を披露

○ふるさと研究員認定書授与

里山里海湖を「守る・学ぶ・活かす・伝える」活動に取組んでいる県民を「ふるさと研究員」として認定し、研究所との共動による体験イベントや講演活動、知恵の伝承活動などを通し、里山里海湖の活動機運を盛り上げていく。

ふるさと研究員に認定された２９名を代表し、若狭町の大野文子さんに認定証を授与。

○ふくい里山里海湖活動表彰

里山里海湖の保全・活用等に取組む活動者を顕彰することを目的として、平成２６年度から「ふくい里山里海湖活動表彰」制度を設けた。

県内市町等からの推薦があった候補団体から７団体に表彰状を授与。

○うららの里山里海湖写真コンテスト

県民が福井県の素晴らしさに気づき、誇りを持てるよう、県内の里山里海湖の人と自然が互いに支え合っている景観の写真を募集。

知事賞に選ばれた広部紀美子さんに表彰状を授与。

第三部　里山里海湖トークセッション

○基調講演　「里山のビジネス創出、楽しみづくり～里山資本主義の試み～」

ＮＰＯ法人共存の森ネットワーク理事長澁澤寿一氏（里山里海湖研究所研究アドバイザー）から、持続可能な里山の暮らしづくりについて講演

○事例発表と意見交換

・三田村美恵　氏　日本農武士ネットワーク代表（坂井市）
・小中　真道　氏　ＮＰＯ法人くくのち副理事長　（石川県金沢市）
・堂下　雅晴　氏　殿下の里づくり組合事務局　（福井市）
・小寺　春樹　氏　ＮＰＯ法人山菜の里いび理事長　（岐阜県揖斐川町）

その他

○里の恵みの試食

嶺南各市町の団体から、自然環境や人の営みにより育まれてきた特産品や伝承料理等「里の恵み」を提供

・杉箸アカカンバの漬物　（杉箸アカカンバ生産組合：敦賀市）
・シシ汁　（ＮＰＯ法人自然と共に生きる会サンガ：美浜町）
・若狭小判　（米Ｃａｆｅくるり：若狭町）
・エビと大豆の佃煮　（伍助のごんちゃん：若狭町）
・鯖のなれずし　（たがらす我袖倶楽部：小浜市）
・きのこの炊き込みごはん　（合同会社おおい夢工房：おおい町）
・杜仲茶（高浜町杜仲茶生産組合：高浜町）

○里山山整備機械の展示実演

薪割機やウッドチッパー、組立式炭化炉といった里山整備の資機材の展示実演。参加者は資機材やそれらを用いて出来た薪、チップ、竹炭を確認。

（３）日独ＳＡＴＯＹＡＭＡ研究フォーラム

ドイツの研究者を招いて、自然科学、農業経済学、文化人類学、地域コミュニティ論、アート・メディアなど多様な分野における里地里山の保全と持続可能な利用に関する日独の研究成果を発表し、今後の学術および社会的な課題について議論した。

人口減や耕作放棄地等里山を取り巻く共通の悩みを抱える両国の研究者が、その克服に向け里山を多面的な機能を備えたインフラとして捉える視点が示されるとともに、里山里海湖研究所研究員が今後進める研究について発表を行った。

■日本とドイツの里地・里山の生物多様性・生態系サービス研究

ラムサール条約湿地となっている三方五湖などを事例に、日本とドイツの里地・里山の生物多様性と生態系サービス研究の最前線を一般向けに発表

日　時：平成２６年８月３０日（土）１３：３０～１６：３０
場　所：福井県立三方青年の家（若狭町）
参加者：１７０名

■ワークショップ

「Perception and valuation of satoyama ecosystems -approaches from natural sciences, economics, and the arts 」
（里山生態系の認識と評価－自然科学、経済学、人文科学からのアプローチ）

日独の研究成果を発表し、今後の学術および社会的な課題について活発な議論を行った。

日　時：平成２６年８月３１日（日）１３：３０～１８：００
場　所：福井県国際交流会館（福井市）
参加者：３０名
研究員の発表:

- 北川淳子　Detecting the exact timing of paddy field landscape formation using annual varved sediments
- 石井　潤　Vegetation restoration in a floodplain wetland, Watarase wetland, Japan
- 中村　亮　Cultural and social changes impacted by the environmental conservation in the coastal region of Kilwa, Tanzania
- 福島　空　Local revitalization through sustainable use of satoyama resources by involving urban citizens

３０日の模様

３１日の模様

日独研究者の集合写真

（４）ＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ国際パートナーシップ第５回定例会合（ＩＰＳＩ-５）

１０月４日（土）～６日（月）にかけて韓国平昌（ピョンチャン）において「ＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ国際パートナーシップ第５回定例会合（ＩＰＳＩ-５）」が開催された。

６日に行われたサイドイベントの基調講演において、国連大学の武内和彦上級副学長から、昨年本県で開催されたＩＰＳＩ－４やコウノトリ呼び戻す農法米について報告がなされた。

その後、本県やネパールなど４つの活動報告が行われ、本県からは、多様な関係者で構成されている三方五湖自然再生協議会やコウノトリの野生復帰を目指している活動を報告した。

また、昨年のＩＰＳＩ－４の成果を受けて三方湖の湖畔に開設した里山里海湖研究所の活動、とくに「福井ふるさと学びの森」の活動について報告を行なった。

各国からの約１５０名の参加者は、本県の「里山里海湖」を次世代に継承する取り組みを興味深く聞き入っていた。

■開催概要

日　程　平成２６年１０月４日（土）　総会
５日（日）　公開フォーラム
６日（月）　サイドイベント

開催地　韓国・平昌（ピョンチャン）

テーマ　ＳＡＴＯＹＡＭＡでの活動の促進

会場の模様

武内副学長の報告

本県の発表

４　研究員の活動

（１）研究の概要

□環境考古

「三方五湖と北潟湖周辺の里山景観の変化の歴史を花粉分析で調べる」

担当：北川　淳子

【背景】

里山の起源は縄文時代に遡るが（Kitagawa and Yasuda 2004, 2008、Berglund et al. 2014）、効果的な土地利用が始まったのは弥生時代と考えられる（Berglund et al. 2014）。その中で里山は人間活動にとって重要な森林資源を提供してきた。その景観の変遷史には長期間に渡る自然と人間のかかわり合いの歴史が詰まっている。

長い歴史の中で、里山の景観は一様でなく、人間の活動の強弱や種類により、変遷している。江戸期の飢饉の時代の人口減少による田畑の放棄による荒廃、近年では現代的な林学の導入による植林、エネルギー革命、化学肥料の利用、減反政策などによる農地の放棄など景観変化の要因がたびたび起こっている。特に戦後の拡大造林時代以降、里山の景観は大きく変化してきた。現代的生活が導入されてくる中で伝統的景観が失われ、自然との関わりが変化し、日本では持続的資源利用の観点から里山の保全活動が行われ、観光資源としての活用が行われつつある（井上 他 1996）。縄文時代から現在まで、人間と自然環境は密接に関わり合いながら、里山という特殊な景観や環境を形成してきた。

【目的】

三方五湖周辺や北潟湖周辺には多数の遺跡があり（福井県、http//info.pref.fukui.jp/bunka/bunkazai/maizou/index.html）、縄文時代からの人間活動の跡が存在する。本研究では、縄文時代、弥生時代、荘園の発達した時代、寒冷期の飢饉、そして、近年の植林や里山利用の衰退に伴う周辺の植生や植物相の変化を明らかにする。

今年度は、その予備調査として、北潟湖では、古代から現代の変化の傾向を水月湖では、過去100年の変化を知るため、水月湖と北潟湖の花粉分析を一部行った。

【材料・方法】

水月湖と北潟湖においてボーリング調査を行った。水月湖では機械ボーリングによる調査の他に、2014年から過去およそ100年分の堆積物を採取するため、リミノスサンプラーを利用した。

水月湖の中心の最深部（図１）にて堆積物を採取した。最上部まで年縞が観察された。

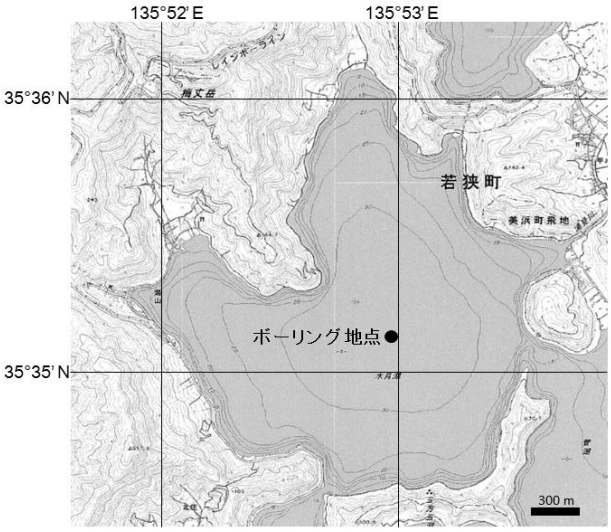


図１　水月湖ボーリング地点

実験室で堆積物を0.5cmにスライスし、66サンプルにわけ、それぞれおよそ1ccの堆積物を花粉分析用に分けた。

この中の８サンプルを予備調査として分析した。

花粉の抽出はNakagawa et. al.（1998)の方法で行い、グリセリンゼリーに封入し、光学顕微鏡(Nikon BIOPHOTO)を利用し、400倍で、各サンプル、樹木花粉をできる限り500以上観察した。花粉の出現率は湿地性・水生の植物を除く植物の花粉の総数を基数として計算した。

北潟湖では、ロシア式ピートサンプラーを利用し、湖の５ヶ所で連続した堆積物を採取し、湖の

最も広い場所の中心部（図 2）で採取したサンプルを分析した。

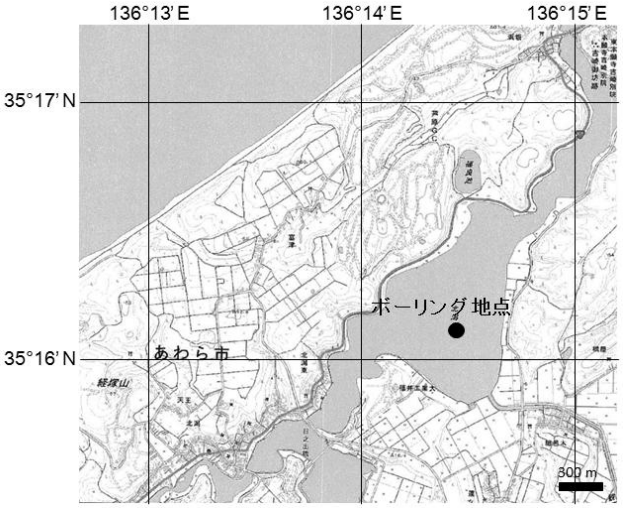


図 2　北潟湖のボーリング地点

1cm ごとにスライスし、およそ 1cc を分析用サンプルとした。その中の 8 サンプルを予備調査に利用した。花粉抽出、観察、花粉出現率の計算は水月湖のサンプルと同様である。

【結果と考察】

主な花粉群の出現率は図 3（水月湖）と図 4 に示す。北潟湖周辺では、人間の活動が活発になる前は、常緑広葉樹の林が広がっていた。湿潤な日本海側に典型的なスギ林はここでは少なかったようである。稲作や製塩のために、森林伐採が行われ、今日のような広大な水田の広がる平野部と森という景観ができたようである。その後も、外来種を導入するなど、景観の変化に富んでいた。水月湖の堆積物は、歴史に残る近年の大きな変化、つまり、護岸のコンクリート化やスギの植林、マツ枯れをとらえていた。そして、過去には劣性であった樹種の花粉の増加が近年の堆積物中に観察できた。これは里山を放置したことが原因と考えられ、刻々と里山の環境が変化していることが伺える。さらに分析をすすめることで、過去の積極的な利用をしていた時代も、現在も様相を変化させる里山景観の歴史を明らかにすることができるだろう。

北川　淳子

福井県里山里海湖研究所主任研究員

（環境考古分野）

専門／環境考古学、民族植物学、植物考古学

最終学歴／グエルフ大学（カナダ）生物学部大学院博士課程

職歴／国際日本文化研究センタープロジェクト研究員　等

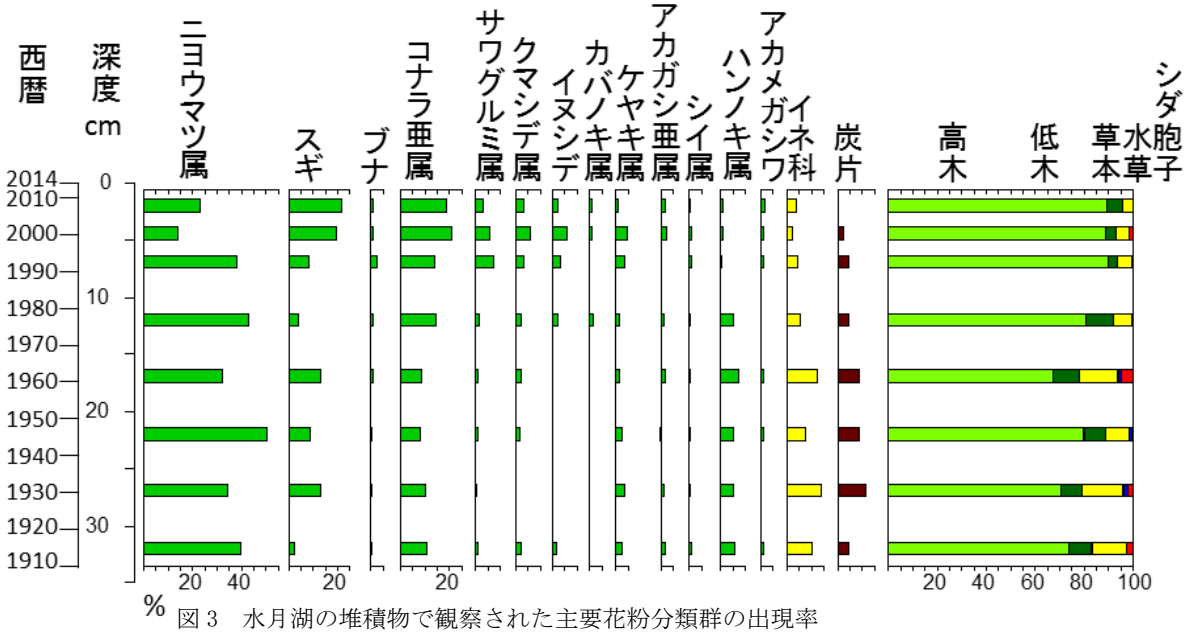


図 3　水月湖の堆積物で観察された主要花粉分類群の出現率

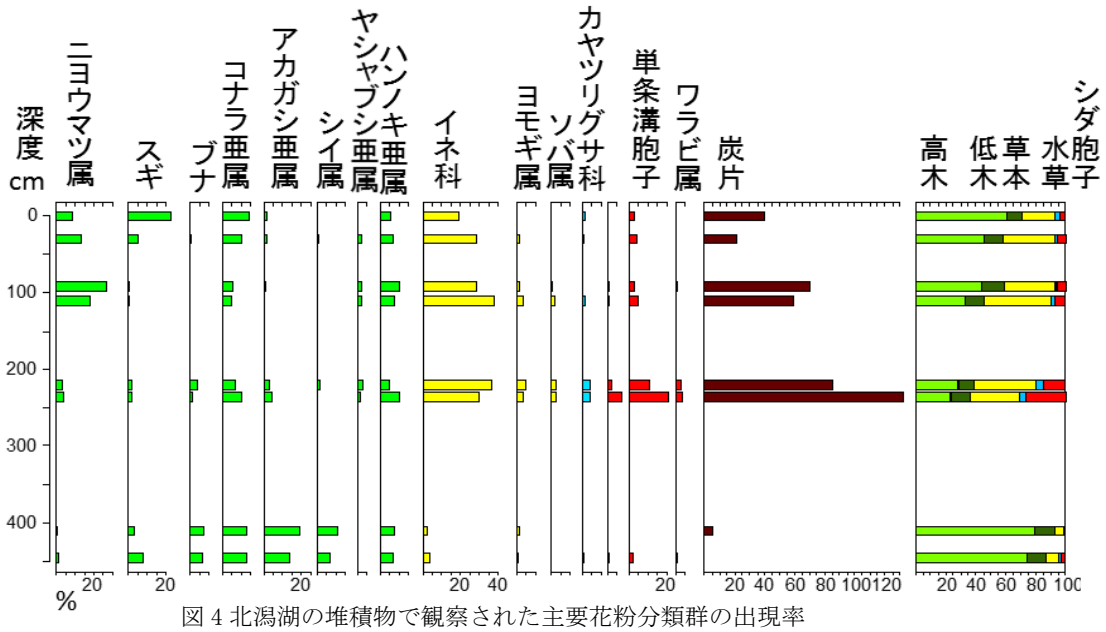


図 4 北潟湖の堆積物で観察された主要花粉分類群の出現率

【引用文献】

Berglund, Björn E., Junko Kitagawa, Per Lagerås, Koji Nakamura, Naoko Sasaki, Yoshinori Yasuda 2014. Traditional Farming Landscapes for Sustainable Living in Scandinavia and Japan: Global Revival Through the Satoyama Initiative. AMBIO 43(5):559-78. DOI 10.1007/s13280-014-0499-6

福井県（http://info.pref.fukui.jp/bunka/bunkazai/maizou/index.html）埋蔵文化財索引地図

福井県（編）1996. 福井県史通史編 4 近世二

井上和衛・中村攻・山崎光博 1996. 日本型グリーンツーリズム. 252pp. 都市文化社

川勝平太・安田喜憲法 2004. 敵を作る文明和をなす文明. 285pp. PHP 研究所

川村智子 1977. スギ（Cryptomeria japonica）の分布に関する花粉分析学的研究（I. 秋田県）. 花粉 11: 8-20.

Kitagawa, J. and Yasuda, Y. 2008. Development and distribution of Castanea and Aesculus culture during the Jomon period in Japan. Quaternary International 184: 41-55

Kitagawa, J. and Yasuda, Y. 2004. The influence of climatic change on chestnut and horse chestnut preservation around Jomon sites in Northeastern Japan with special reference to the Sannai-Maruyama and Kamegaoka sites. Quaternary International 123-125: 89-103

松岡數充・三好教夫 1998. 最終氷期最盛期以降の照葉樹林の変遷－東シナ海東部から日本海沿岸を中心として. 安田喜憲・三好教夫編「図説日本列島植生史」pp. 224-236. 朝倉書店

Nakagawa, T. 2007. Double-L channel: An amazingly non-destructive method of continuous sub-sampling from sediment cores. Quaternary International 167-68 (Supplement):298.

Nakagawa, T., E. Brugiapaglia, G. Digerfeldt, M. Reille, J.-L. deBeaulieu, and Y. Yasuda. 1998. Dense-media separation as a more efficient pollen extraction method for use with organic sediment/deposit samples: Comparison with the conventional method. Boreas 27:15-24.

高原光 1991. 近畿地方および中国地方東部における最終氷期以降の森林変遷に関する花粉分析学的研究. 162p、京都府立大学博士論文

【協力研究機関】

立命館大学、島根大学、東京大学、ふじのくに地球環境史ミュージアム、
明治大学

□保全生態

「北潟湖の自然再生に向けた過去から現在までの植生の変遷と要因の検討」

担当：石井　潤

【背景】

北潟湖（面積 2.13 km^2）は、福井県の最北端に位置し、日本海にそそぐ大聖寺川の河口付近に形成された汽水から淡水の湖である。湖の出口には開田橋水門が設置され、治水のための水量調節と農業用水として利用される湖の水の塩分濃度調節の役割を担っている。魚類は汽水性から淡水性までの種が生息しており、マガン、ヒドリガモ、マガモの渡来地として、環境省が定める「日本の重要湿地 500」に登録されている。

近年、北潟湖では、富栄養化、外来魚ブルーギルをはじめとする外来生侵入、湖岸植生帯の消失など、生物多様性および生態系保全上の課題がある。水門の設置によって淡水化が進んだ北潟湖は、農業用水の利用や淡水での内水面漁業の場として地域の農業や漁業の発展に寄与してきたが、農業における塩害の発生や漁獲量の減少など、その対策が課題となっている。

これらの課題解決に向けて、2013 年度に、「北潟湖自然再生に関する協議会」が設置され、地域住民が参加し将来世代に続く湖の自然環境の利用方法を議論し、その決定に参加する自然再生の取り組みが開始された。現在、協議会では、自然再生の目標と具体的な取り組みを定めた「全体構想」の策定が喫緊の課題となっている。

【目的】

本研究では、「北潟湖自然再生に関する協議会」の全体構想における目標検討のために必要な基礎情報として、北潟湖およびその周辺域の過去から現在までの生物相の変遷を検討した。調査対象として、生物群集の基盤となる植生に焦点を当てた。過去から現在までの空中写真を判読して、植生を含む土地被覆および土地利用（市街地、農地など）の変化を調査した。

【内容】

撮影時期の間隔が 30 年前後の 3 時期（1948 年 7 月 10 日、1/9,954;1975 年 9 月 24 日および 1975 年 10 月 22 日、1/8,000；2008 年 4 月 29 日、1/10,000）の空中写真を入手し、北潟湖およびその周辺域の写真判読を行った。写真判読は、地理および地形条件から区分した 5 つのエリア（図 1：①浜坂・吉崎・細呂木付近、②北潟・細呂木・蓮ケ浦付近、③日の出橋付近、④小牧付近、⑤赤尾付近）ごとに実施した。

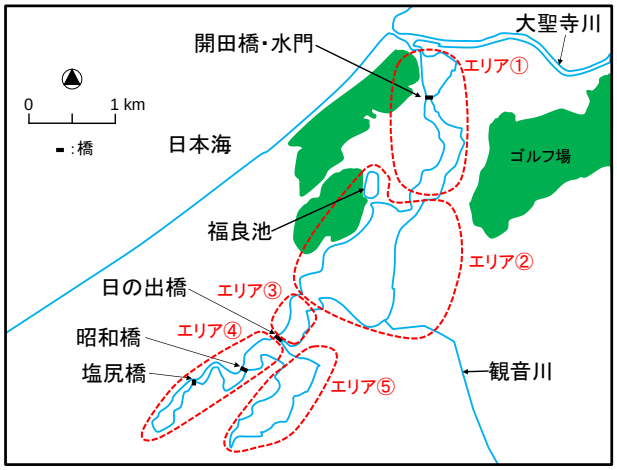


図 1 北潟湖と空中写真判読のための各エリア

図 2 に、3 時期に撮影された空中写真を示す。全体の傾向として、北潟湖では、1948 年には広い範囲で湖岸に植生が認められたが、1975 年には一部の湖岸においてコンクリート護岸が建設されて、植生が消失していた。2008 年には、さらに護岸のコンクリート化および湖岸植生の消失が進行していた。

また、1975 年の空中写真でのみ、比較的広範囲において浮葉植物の群落が確認された。北潟湖の周辺域に住んでいる地元住民を対象とした聞き取り調査では、この浮葉植物はヒシ *Trapa japonica* であることが示唆されている（石井、未発表）。

1975 年および 2008 年の空中写真では、湖に流入する河川の河口または水路の流出口付近に限って、部分的に新たに植生が発達している様子も確認された。

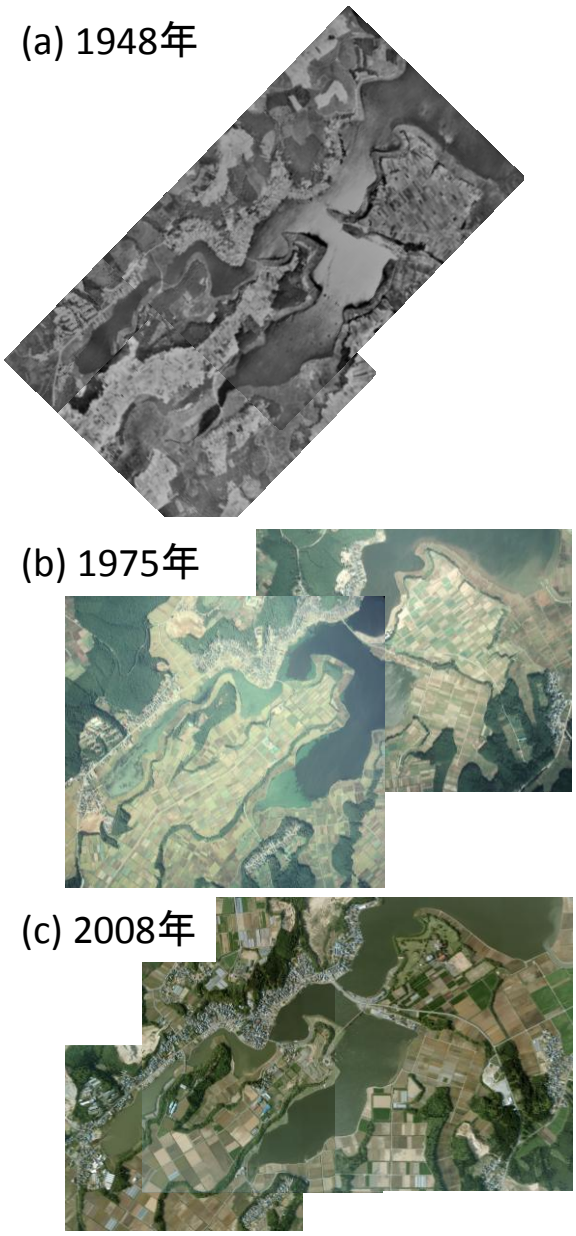


図 2 北潟湖およびその周辺域の空中写真。エリア③～⑤のみ示す。(a) 1948 年、(b) 1975 年、(c) 2008 年。1975 年の空中写真は、9 月および 10 月に撮影された写真を組み合わせた。

一方、北潟湖の周辺域にある集落の面積は、3 時期の間で大きな違いは認められなかった。

農地は、1975 年と 2008 年において、一部が耕作放棄されており、特に湖岸でその傾向が強かった。

1948 年に森林が成立していた場所の一部は、1975 年および 2008 年には、農地化または土壌が露出した場所となっていた。後者については、上述の聞き取り調査と現地調査の結果から、土砂採取によって砂質の土壌が露出したものであることが指摘されている（石井、未発表）。

1975 年および 2008 年の空中写真では、湖岸に接する農地および河川、水路から濁水が流入しているのが確認された。河川および水路から流入する濁水は、農地由来の可能性と、上流側に土砂採取場がある場合、土砂採取場由来の可能性が考えられる。同時期に確認された河口または水路の流出口付近に発達していた植生は、これらの濁水由来の土壌が堆積した場所に成立した可能性が考えられる。

以上の結果から、北潟湖では、1948 年以降、植生がダイナミックに変化しており、全体としては、一時的に湖面に浮葉植物が広範囲に分布していたものの、現在までに、湖岸の植生の面積は減少傾向である可能性が示唆された。部分的には、周辺地域の農地および土砂採取場からの土壌の流入により、植生が発達した可能性が考えられる。

石井　潤

福井県里山里海湖研究所研究員

（保全生態分野）

専門／保全生態学、環境情報工学、植物生態学

最終学歴／神戸大学大学院自然科学研究科
生命科学専攻後期博士課程

職歴／東京大学大学院農学生命科学研究科
特任助教　等

□里地里山文化

「里山里海湖文化の比較研究」

担当：中村　亮

【背景】

県内の里山里海湖については、これまで自然科学の分野での調査研究が充実しており（福井県みどりのデータバンク、自然保護センター調査研究報告書など）、社会科学からのアプローチは希少である。「里山」の自然環境とともに生きてきた人々の生活文化を再認識し、既存の研究成果と統合することで、学際的に里山里海湖の「魅力」や「現代的課題」を理解する必要がある。

【目的】

多様な自然環境（山地、中山間部、平野部、台地、盆地、湿地、河川流域、汽水湖、海洋沿岸など）によって育まれた県内各地の生活文化について、文献と現地調査によりその歴史と現状、現代的動態について解明することが研究の目的である。里山里海湖文化の全貌解明が研究の重要課題であるが、そのためには各地における詳細な現地調査・民俗学研究が必要である。これより、自然・社会環境、なりわい、経済、歴史、信仰、食文化の過去と現在を認識することができ、現代的な課題が浮き彫りにされると考える。後継者や過疎化の問題、第一次産業の衰退の原因、開発―保全―住民生活のバランスの問題などにも、実証的な研究成果に基づいた提案が可能になるものと期待される。地域のミクロな問題解決に貢献できる実学的研究とともに、各地域の文脈にそった教育プログラムを作成実践することで、次世代を担う若者層への自然・社会環境教育をおこなうことも研究の全体構想に含まれる。

【内容】

初年度は、福井県の里山里海湖生活文化の解明を目指した「里山里海湖文化プロジェクト」の開始に向けて、広域での調査（三方五湖、北潟湖、上味見、越前、小浜内外海地域など）と来年度からの研究協力ネットワーク構築に活動の重点を置いた（図 1）。

研究協力者と実施した現地調査としては以下の 3 件がある。

- 雄島の海女文化調査：11 月 18 日～19 日、中川千草研究員（総合地球環境学研究所）
- 小浜の食文化調査：1 月 13 日～14 日、古澤礼太准教授（中部大学）
- 名田庄・下根来の祭礼文化:2 月 23 日～24 日、今井一郎教授（関西学院大学）

研究成果は随時、教育活動に活かした。小中学生への講義のテーマは「生物多様性」と「文化多様性」に絞った。現地調査によって得られた身近な事例を使用することで、児童・生徒が実感をもって理解できるように意図した。同時に、海外の事例を交えることで、児童・生徒に国際的な感覚をもってもらえるように配慮した。

福井県立大学に福井の里山を活用した授業の必要性を説き、来年度から里山実習がカリキュラムに組み込まれることになった。第一回目は、北潟湖周辺の自然と文化をテーマに石井研究員と共同で里山実習を実施する（地域社会とフィールドワーク B「里の生物と文化の多様性（Bio-Cultural Diversity in a SATOYAMA landscape in Fukui）」）。

福井県里山里海湖研究所の所属として、国際シンポジウム発表（3 件）、学会発表（2 件）、研究会発表（2 回）、招待講演（2 回）、分担執筆（4 本）の研究成果をあげることで、研究所のアピールにも努めた。いずれもアフリカの事例ではあるが、「なりわい」や「環境保全」をテーマにしているので、今後、福井県への応用が可能である。

今後の課題は、1) 里山里海湖研究プロジェクトの開始、2) 県史、町史などの資料収集、3) 教

育への貢献、4) これまでアフリカや東南アジアでおこなってきた文化人類学研究を福井での民俗学研究に活かしてゆくこと、である。

中村　亮
福井県里山里海湖研究所研究員
（里地里山文化分野）
専門／里山里海湖の民俗学、文化人類学、環境人類学
最終学歴／名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程
職歴／総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員　等

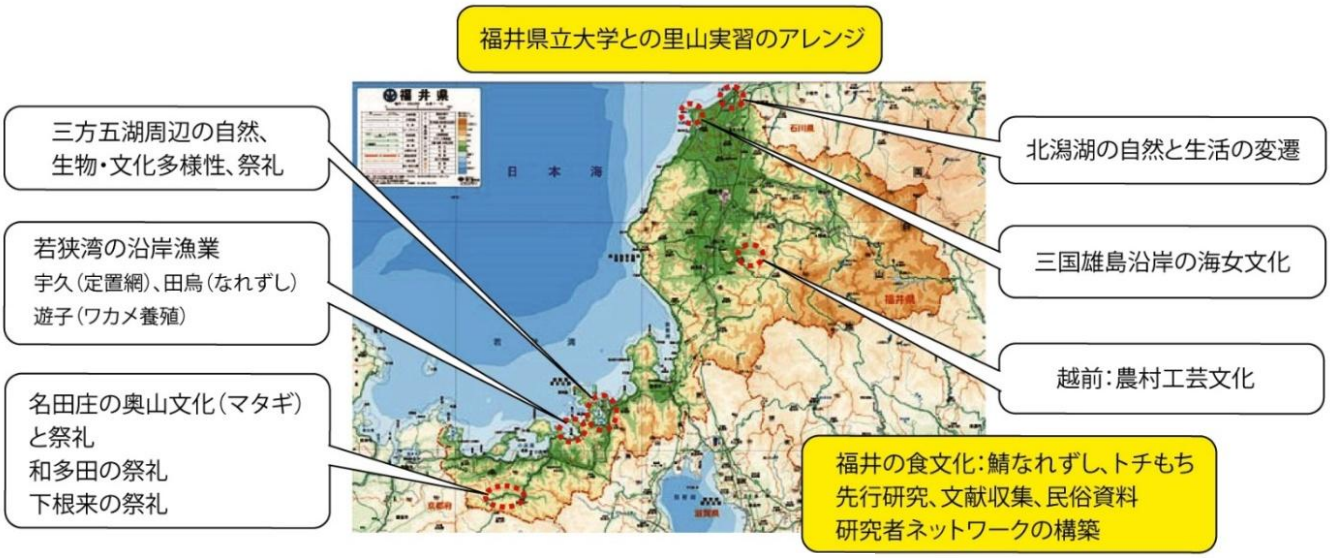


図１．平成 26 年度の主な活動

聞き取り調査風景

三方湖のたたき網漁

北潟湖のうなぎ筒漁

□森里海湖連環

「里山里海湖保育（森のようちえん）の推進」

担当：福島　空

【背景】

里山と人のつながりが薄れ、子どもたちが身近な自然に触れる機会が少なくなる一方、自然環境をフィールドに活動し、子どもの成長を促す「森のようちえん」と呼ばれる体験型自然保育（幼児教育）が近年注目を集めている。鳥取県や長野県などの先進地域では、居住地域外からの通園や子育てを目的とした移住などの事例も見られ、自然豊かな環境での育児を希望する子育て世代からのニーズが高まっている。

県内でも、地域の里山での日常的な体験保育を行う「岡保保育園」や、野外体験活動の受け入れを行う「ノーム自然環境教育事務所」などの体験型自然保育を実践する団体も見られるが、先進県と比較しても活動者が少ないのが現状である。

【目的】

県民および保育・幼児教育関係者の意識醸成、体験型自然保育におけるノウハウの蓄積・共有、活動者の支援などを中心とした活動を実施し、県内における体験型自然保育の盛り上がりを醸成し、ふるさとの里山里海湖を想う人づくりにつなげていくことを目的とする。

【平成２６年度の活動】

里山体験の実践活動

平成２６年６月２１日に若狭町気山地区に開設した「福井ふるさと学びの森」において、実践事例の蓄積および参加者からの情報収集を目的として、イベント型の親子里山体験の実践活動を実施した。

（全９回企画：うち２回は荒天のため中止）

①みんなで作ろう！森の遊び場

（平成２６年７月２６日）

自然に親しむことを目的として、森の中にある自然の素材を利用した秘密基地づくりやアスレチックなどを実施

②竹をフル活用！竹工作とそうめんパーティー（平成２６年８月２１日）

竹害等の里山の課題に触れながら、竹を加工した食器づくり、流しそうめんなどの体験を実施

③森のエネルギーで火を起こそう

（平成２６年９月２１日）

樹木がもつエネルギーとしての資源に注目し、薪割り体験や薪を使った炊飯などの体験を実施

④ウッジョブ！森のお手入れ大作戦

（平成２６年１０月１９日）

森を健全に維持していくための林業の仕事を解説し、間伐や枝打ちなどの作業を間近に見る機会を提供

⑤里山のおいしいめぐみ！キノコを作ろう

（平成２６年１１月９日）

森の分解者であるキノコに注目し、しいたけやなめこの菌打ち体験、キノコ鍋づくりを体験

⑥探そう！里山の秋

（平成２６年１１月１６日）

樹木の季節ごとに変化する命の仕組みに注目し、落葉を使ったネイチャーゲームや、焼き芋づくりなどの体験を実施

⑦聴こえた！春の足音

（平成２７年３月２８日）

春の里山を散策し、春に特徴をもつ樹木の樹名板作成・取付け、春の恵みの食体験を実施

上記イベントの実施に加え、近隣幼稚園・保育園を受け入れた里山体験活動を２回実施した。

イベントの参加者に対して実施したアンケート調査では、親世代、子世代ともにこのような里山に親しむ活動に対し、高い満足度を示した。現状では体験の機会が多くないため、もっとこうした体験を実施してほしいという意見も多く、親世代からのニーズを確認することができた。

一方、参加者のほとんどは、これまでに同様の活動に参加した経験があり、自然体験に興味・関心の高い層であった。そのため、今後は関心が低い層をこのような活動にいかに取り込んでいくかが課題となる。

県内の現状把握

保育園関係者等への聞き取りや、坂井市保育士会の研修において講座を実施し、福井県の里山里海湖保育に関する現状把握を実施した。その結果、体験型自然保育への関心・ニーズの高まりが見られるものの、「保育者側のノウハウ不足」「体験フィールドの確保」「活動への理解形成の不足」などの問題が障害となり、活動につなげられないケースも多く見られることが分かった。

今後は、こうした課題を解消するための活動支援のあり方について、検討を進めていく。

福島　空

福井県里山里海湖研究所研究員

（森里海湖連環分野）

専門／国際森林環境学

最終学歴／東京大学大学院
農学生命科学研究科農学国際専攻

職歴／東京農業大学農山村支援センター
学術研究員　等

（２）学会発表・執筆活動等

北川　淳子

【執筆】

北川淳子．水月湖年縞の発見と環境考古学の発展．ナチュラリスト 73，1-2（2014）

石井　潤

【学会発表】

（口頭発表）

石井潤　福井県北潟湖の自然再生に向けた植生変化と要因の解析、日本生態学会第 62 回大会、平成 26 年 3 月 21 日　鹿児島大学

【執筆】

石井潤　三方五湖自然再生協議会による自然再生の取り組み、グリーン・エージ、平成 27 年 3 月号、41-44

中村　亮

【学会・シンポジウム発表】

（口頭発表）

中村亮「スワヒリ海岸南部キルワ島の資源利用と信仰」第一回国際シンポジウム：アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の歴史自然生態学的研究。2015 年 2 月 27-28 日、名古屋大学.

中村亮「アフリカ漁民の資源利用と信仰：タンザニア南部イスラーム海村キルワ島の事例より」専門を超えて考え話し合う②　海からアフリカを考える、2015 年 2 月 21 日、神戸大学海事科学研究科国際海事研究センター.

中村亮「スワヒリ海岸キルワ島をめぐる環境保全と精霊信仰」地域漁業学会第 56 回大会、2014 年 10 月 25-27 日、三重大学生物資源学研究科.

NAKAMURA, Ryo and Adel Mohamed SALEH “Maritime Culture in Dry Land: Conservation and Management in Dry Land Coastal Resources” IUAES2014, 2014/05/15-2014/05/18, Makuhari Messe, Chiba, Japan.

（ポスター発表）

中村亮「スワヒリ海村の干物考：タンザニア・キルワ島の海産物保存と経済戦略」ポスターフォーラム、日本アフリカ学会第 51 回学術大会、2014 年 5 月 24-25 日、京都大学.

【執筆】

（分担執筆）

中村亮・アーディル・ムハンマド・サーリフ 2015/3「乾燥地のサンゴ海をめぐる資源の利用と管理：スーダン紅海沿岸ドンゴナーブ村の漁撈文化」西本真一・縄田浩志編『サンゴ礁』アラブのなりわい生態系 5、臨川書店、pp. 285-324.

市川光太郎・中村亮 2014/7「ドンゴナーブ湾におけるジュゴン混獲事例報告」市川光太郎・縄田浩志編『ジュゴン』アラブのなりわい生態系 7、臨川書店、pp. 179-188.

アーディル・ムハンマド・サーリフ／中村亮 2014/7「漁師とジュゴンの共存をめざして：スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区のジュゴン混獲問題」市川光太郎・縄田浩志編『ジュゴン』アラブのなりわい生態系 7、臨川書店、pp. 163-178.

中村亮 2014/4「アフリカで出逢った二人の篤漁家」縄田浩志・篠田謙一編著『砂漠誌：人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』東海大学出版会、pp. 419-420.

中村亮 2014/4「砂漠の海に生きる：スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾の漁撈文化」縄田浩志・篠田謙一編著『砂漠誌：人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』東海大学出版会、pp. 305-311.

（３）その他活動報告

研究活動報告を「研究員の活動発表会」および「里の元気フォーラム（P17)」で行った。

また、地域の要請に応じ多数の出前講座（P5～6）を行ったほか、学校教育や生涯教育、地域イベントにおいて積極的に活動した。また、水月湖年縞堆積物のボーリング調査が夏に行われ、水月湖の年縞について多くの人に知っていただくため、ボーリング調査現場や講演会などで説明を行った。

【福井県里山里海湖研究所「研究員の活動発表会」】

○平成 26 年 5 月 16 日　福井県国際交流会館

・北川淳子　「花粉分析で里山での人間活動の歴史をひもとく」

・石井　潤　「水辺の植生の生態学的・保全生態学的研究」

・中村　亮　「福井の里山里海湖文化の研究」

・福島　空　「里山里海湖と人の関わり」

【招待講演】

No.	開催日	題	会議名・主催等	開催場所	担当
1	H26.11.7-8	隠された文化遺産：タンザニア・キルワ島のユネスコ世界文化遺産の今日的意義	国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」公開フォーラム	国立民族学博物館（大阪府吹田市）	中村
2	H26.11.13	水月湖年縞堆積物の構造と環境学研究の可能性	日本土壌肥料学会中部支部例会	プラザ萬象(敦賀市)	北川
3	H26.12.18	アフリカ漁民の世界：沿岸資源をめぐるインド洋西海域世界の比較研究	第 207 回アフリカ地域研究会	稲盛財団記念館（京都市）	中村

【その他受入講座】

No.	開催日	題	会議名・主催等	開催場所	担当
1	H26.8.4	年縞のはなし ラムサール条約登録湿地である三方五湖の生物多様性と自然再生における課題	北海道霧多布高校ラムサール湿地視察研修（霧多布高校）	里山里海湖研究所・若狭町観光船レイククルーズ（若狭町）	北川 石井
2	H27.1.21	水月湖年縞堆積物	自然再生協議会全国会議	福井県立三方青年の家（若狭町）	北川

【イベントでの展示・解説】

No.	開催日	内容	イベント名（主催）	開催場所	担当
1	H26.5.4	三方湖の水草や遊歩道沿いに生育する植物について解説	里山里海湖ミニウォークと竹のおもちゃづくり（里山里海湖研究所）	里山里海湖研究所とその周辺（若狭町）	石井
2	H26.5.17-18	水月湖年縞展示「地球の時計」年縞の花粉を覗いてみよう	若狭・三方五湖ツーデー マーチ（若狭町）	若狭町中央公民館（若狭町）	北川
3	H26.6.21	水月湖年縞展示	「福井ふるさと学びの森」オープニング（里山里海湖研究所）	福井ふるさと学びの森(若狭町)	北川
4	H26.7.12-13 7.19-20 8.2-4	水月湖年縞調査湖上解説	水月湖年縞ボーリング調査（福井県）	若狭町観光船レイククルーズ（若狭町）	北川
5	H26.9.14	年縞展示	若祭（若狭町）	縄文ロマンパーク（若狭町）	北川

５　研究所資料

（１）沿革

平成２５年	９月	「ＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ国際パートナーシップ
（2013年）		第４回定例会合（ＩＰＳＩ－４）」を福井県で開催
	１０月	福井県里山里海湖研究所を若狭町鳥浜に開所
平成２６年	３月	中期計画（平成２５～２９年度）策定
（2014年）	４月	研究員４名採用
	６月	「福井ふるさと学びの森（若狭エリア）」を若狭町気山に開設
平成２７年	３月	ふるさと研究員認定
（2015年）	５月	「福井ふるさと学びの森（あわらエリア）」をあわら市北潟・波松に、
		「福井ふるさと学びの森（奥越エリア）」を大野市南六呂師に開設

（２）組織

※平成２７年７月１日現在

所　長

進士五十八　東京農業大学名誉教授（環境学・造園学）

研究アドバイザー

- 安田　喜憲　立命館大学環太平洋文明研究センター長　（環境考古学）
- 鷲谷いづみ　中央大学教授　（保全生態学）
- 澁澤　寿一　ＮＰＯ法人共存の森ネットワーク理事長　（コミュニティ論）
- 養父志乃夫　和歌山大学大学院教授　（里地里山文化論）
- 寺岡　英男　福井大学副学長　（教育方法学）

事務局長

野坂　雄二　福井県安全環境部企画幹（自然環境）

事務局

研究事務員
- 吉田　浩樹
- 岡本　圭史
- 土橋　佳久
- 坂川　和也
- 藤崎　博隆

・里山里海湖相談員
- 田中　昌文
- 田中　　治
- 和田　千代

専任研究員
- 北川　淳子（環境考古）
- 石井　　潤（保全生態）
- 中村　　亮（里地里山文化）
- 福島　　空（森里海湖連環）

併任研究員
- 吉岡　俊人　福井県立大学教授　（植物生態学）
- 富永　　修　福井県立大学教授　（海洋生物学）
- 田原　大輔　福井県立大学准教授　（魚類生態学）
- 松本　　淳　越前町立福井総合植物園園長　（植物分類学）

併任研究事務員（※教育関係）
- 川上　純朗　福井市宝永小学校校長
- 藤本　利美　若狭町熊川小学校校長
- 三崎　光昭　福井県教育庁義務教育課指導主事
- 知場　克幸　福井県嶺南教育事務所指導主事
- 松宮　裕子　福井県嶺南教育事務所研修課研究員

（３）所長・研究アドバイザー

所　長

氏　名	所属組織、役職	専門分野等	主な著書等
進士五十八 	東京農業大学 名誉教授・元学長 一般社団法人 農あるくらし研究会 会長 NPO法人美し国 づくり協会理事長	農学博士　環境学、造園学	・ グリーン・エコライフ（小学館） ・ 風景デザイン（学芸出版社） ・ 日本の庭園（中公新書） ・ ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法―農に学ぶ都市環境づくり（学芸出版社） ・ 生き物緑地活動をはじめよう―環境NPO マネジメント入門（風土社）

研究アドバイザー

氏　名	所属組織、役職	専門分野等	主な著書等
安田喜憲 	東北大学大学院 環境科学研究科 教授	環境考古学	・ 森と文明の物語―環境考古学は語る（ちくま新書） ・ 森のこころと文明（NHK ライブラリー） ・ 文明の環境史観（中公叢書） ・ 奪われる日本の森:外資が水資源を狙っている（新潮文庫）
鷲谷いづみ 	中央大学理工学部 人間総合理工学科 教授	保全生態学、 生態学	・ コウノトリの翼：エコロジストのまなざし（山と渓谷社） ・ さとやま：生物多様性と生態系模様（岩波書店） ・ 生物多様性入門（岩波書店） ・ 震災後の自然とどうつきあうか（岩波書店）
澁澤寿一 	NPO 法人共存の森ネットワーク 理事長	コミュニティー論、森林環境、バイオマス利用、教育普及、循環型地域づくり	・ 叡智が失われる前に　山里の聞き書き塾講義録（山里文化研究所） ・ 森の名人ものがたり（アサヒエコブックス 13）
養父志乃夫 	和歌山大学大学院 システム工学研究科 教授	里地里山文化論、農学博士、造園学、自然生態工学、環境社会学	・ アジアの里山　食生活図鑑(柏書房) ・ 里山・里海暮らしの図鑑-いまに活かす昭和の知恵-（柏書房） ・ ビオトープづくり実践帖（誠文堂新光社） ・ 里地里山文化論、上・下巻（農文協） ・ 田んぼビオトープ入門（農文協）
寺岡英男 	福井大学 副学長・理事（教育・学生担当）	教育方法学（授業、カリキュラム、学力）、教師教育	・ 教師教育改革のゆくへ　教師教育改革の試みと課題（創風社） ・ 確かな学力と指導法　教師の実践的指導力を育てるには（図書文化）

（４）活動方針

１　福井県の里山里海湖

（１）里山里海湖の特徴

本県は、豊かな降水量と四季の変化に富んだ気候に加え、水源となる豊かな広葉樹林、複雑に入り組んだ谷筋、豊かな土壌といった自然条件にも恵まれ、古くから、二次林と水田の入り混じった、いわゆる「里山」が形成されてきた。

加えて、比較的狭い地域の中に、山、里、川、海、湖があり、そこには多様なタイプの生態系が存在し、典型的な日本の里山里海湖風景が凝縮している。

また、米・そば・海産物など里山里海湖に培われた食材、和紙・漆器など里山里海湖の素材を活かした工芸品、県内各地に伝わる自然を敬う祭礼・習俗など、本県独自の豊かな里山里海湖の多様性も存在している。

（２）福井県の里山里海湖の現状

本県の里山里海湖の環境は、自然と人が適切に関わることにより守られてきたが、近年、市街化などの開発の進行（宅地面積1992年156k㎡、2011年185k㎡「福井県の土地利用と土地対策」より）や、高齢化（65歳以上割合26.9%「福井県の推計人口（平成25年10月1日現在）」より）などにより、里山里海湖などの利用や管理が適正に行われなくなり、生き物の生息・生育環境が失われつつある。

かつてはどこでも見ることができたホタルやトンボなどの身近な生き物が生息・生育環境の変化により減少している（福井県レッドデータブック掲載動物371種（2002年）、植物458種（2004年））。このため、祖父母や父母、子どもの世代間で豊かな自然のイメージの共有が難しくなるとともに、特に若い世代では、自然とふれあう機会も少ないため自然の価値の認識が希薄になってきている。

一方で、里山里海湖保全・再生・活用に向けた新たな動きも活発化してきており、問題認識を持つ県民も増えてきている。具体的には、越前市白山・坂口地区におけるコウノトリとの共生を目指した米作りや、平成２４年に自然再生推進法に基づき中部圏で初めて誕生した「三方五湖自然再生協議会」などが挙げられる。

（３）「福井県里山里海湖研究所」の設置

平成２５年９月に、人の営みと自然とが調和し共生する社会を目指すための国際会合「ＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ国際パートナーシップ第４回定例会合（ＩＰＳＩ－４）」が本県で開催された。この会合では、県民の里山里海湖保全の意識醸成が一層図られ、福井の里山の保全・再生活動が世界へ広く発信された。また、里山里海湖の資源を守っていくためには、専門的な学問や科学の支えが重要であるとともに、多くの人々が自然体験や自然再生活動を行うことや、農家や林家、漁家の方々が日常営む生活や生産活動などと直接結びついた里地里山活動を進めていくことが重要であるという認識が共になされた。

これを契機に「県民のため、社会のため、実社会に役立つ研究を行い、美しい風土を残しながら福井という地域のみんなが元気になる。」ことを目指し、県は「福井県里山里海湖研究所」を平成２５年１０月３０日に開所した。

２　基本理念

ふくいの里山里海湖を含め、福井県土県域における「生物多様性」「生活多様性」「経済多様性」「景観多様性」の４つの多様性を育み、地域を元気にする。

（１）生物多様性（Bio-diversity）

豊かな自然環境を保全し、多様な自然的土地利用を持続することで生き物の賑いをもたらす。

（２）生活多様性（Lifestyle-diversity）

地域社会が育む「地域それぞれの暮らし方や生き方」を尊重し多様な生活を応援する。

（３）経済多様性（Economy - diversity）

里山ビジネスの開拓や工夫によって、地域内経済経営を活性化する。

（４）景観多様性（Landscape-diversity）

地域地区の自然風土を基盤とした地方文化を尊重し、「地域らしさ」を育成する。

３　活動および運営の方針

県民、自然再生団体、企業、基礎自治体の行政関係者など各種主体の参加と連携により、地域の個性に応じた「研究」、「教育」、「実践」を総合的に進める。

特に、多世代にわたる県民の参加を促すとともに、地域の有識者、教育研究機関とも共動して、元気な人材の輩出やビジネス機会の創出など地域の活性化へとつなげる「地域を元気にする実学研究の拠点」とする。

三つの大きな柱

○　研究【地域に貢献する実学研究（Science for society）】

里山里海湖に関する専門の研究者と県民が、生物多様性を守り、里の恵みを人々の暮らしに結びつける様々な研究を共動する。

○　教育【里山里海湖を「体験」し、「感性」を育む】

里山里海湖の自然を子どもから大人まで体感してもらい、その大切さを伝えるとともに、地域の保全・再生活動を担うリーダーを育成する。

○　実践【次世代につながる持続可能な里山里海湖の保全・再生・活用】

里山里海湖の保全・再生・活用に頑張る地域や団体を応援し支援することにより、里山里海湖と美しい県土を次世代へ継承する。

４　目標

基本理念と活動および運営の方針に基づき、概ね平成２５年度から２９年度までを期間とし、以下の目標を掲げる。

○研究に関する目標

(1) 研究者自らが地域に飛び込み、課題を把握し、その解決に向けた実学研究を行うとともに、その成果を国内外へ広く発信する。
(2) 国内外の試験研究機関と連携し、研究レベルの向上を図るとともに、研究成果を環境教育、実践活動、人々の暮らしへ反映し、地域の活性化につなげる。
(3) 福井を里山里海湖研究の先進地に推し進める。

○教育に関する目標

(1) 幅広い年代に里山里海湖の恵みに触れる場を提供し、里山里海湖を守る心を育む 。
(2) リーダーを育成し、里山里海湖保全・再生・活用の活動の質を高める。
(3) 県内の学校において、研究を活かした環境教育を実施し、子どもたちが里山里海湖の保全・再生について考える力を養う。

○実践に関する目標

(1) 里山里海湖の大切さを継承するため、研究所を、県民が気軽に集い、体験や活動ができる拠点とする。
(2) 自然再生団体、県民や企業など多様な主体による活動を応援し活動への参加を促進する。
(3) モデルとなるフィールドを創り、里山里海湖の保全・再生活動を総合的に実施することにより、里の恵みの保全とその恵みを利用した生業を次世代への継承する機運を高める。

なお、上記の目標を遂行するため本県の里山里海湖の特徴を考慮し、概ね以下の分野について研究・教育・実践を進める。

○環境考古に関する分野

・年縞を基に、過去の気候と人の暮らしの関わりを解明し、これからの生活に活用
・年縞を基にした科学学術的な研究、観光や教育面への活用および採取した年縞の活用

○保全生態に関する分野

・県全域にわたる、里山、里海湖の生物多様性の保全・再生および生態系サービスの分析評価に関する研究
・地域住民、自然再生団体、企業等と共動して実施する自然環境の保全・再生・活用のプロジェクト等に直接参加し、研究成果を基に活動を支援

○森里海連環に関する分野

・県内を中心に、森と海の生態系のつながりに関する研究
・地域住民、自然再生団体、企業等と共動して、豊かな海の生物多様性の保全・再生と「美しい海岸」を守るプロジェクト等に直接参加し、研究成果を基に活動を支援

○里地里山文化に関する分野

・県内を中心に、里に伝わる伝統（農法、漁法等）、文化、習俗等の資料を収集、整理し、県民の生活に活かす研究
・地域住民、企業等と共動して地域の特色を活かした地域づくりのプロジェクト等に直接参加し、研究成果を基に活動を支援

≪編集後記≫

福井県が誇る里山里海湖の素晴らしさを県民の皆様、そして国内外に広く知っていただくため、福井県里山里海湖研究所ではさまざまな活動をしてきました。

今回、２０１４年度の活動の記録として「年報２０１５」を発刊させていただくことができました。研究所としての初めての年報を編集していく中で、研究所の少ない人数で本当に多くの活動を行ってきたことを再認識し、里山里海湖体験活動を行われている方々に支えられながら、研究所が運営できているのだと改めて実感いたしました。

研究所の活動にご協力いただいた皆様には深く感謝申し上げます。

今後とも研究所の足跡を年報という形に残していきたいと思っておりますので、皆様のご指導、ご支援をいただきますようお願い申し上げます。

編集責任者：細井秀之、岡本圭史
編集・執筆：土橋佳久、坂川和也、藤崎博隆
北川淳子、石井潤、中村亮、福島空

福井県里山里海湖研究所年報2015

Fukui Prefectural Satoyama-satoumi Research Institute,
Annual Report 2015

発行年月　平成２７年７月発行
発　　行　福井県里山里海湖研究所
〒919 - 1331
福井県三方上中郡若狭町鳥浜122-31-1
TEL 0770-45-3580　Fax 0770-45-3680
E-mail　satoyama@pref.fukui.lg.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://satoyama.pref.fukui.lg.jp/

健康長寿の福井